陸機の楽府

―「上留田行」を中心に―

佐藤利行・劉金鵬

【キーワード】楽府、上留田行、陸機、曹植、謝霊雲

はじめに

趙敏俐著『中国詩歌通史』に、次のようにある。（注①）

曹植乐府已经有较多的俳偶因素，但文体上还是以叙述为主，较大程度上保持乐府诗的叙事文体，陆机在曹氏的基础上进一步偶俪化，造成一种尚修辞、重意理的乐府文化。并且后来的谢灵运、沈约等人晋宋乐府诗作者所继承，成为汉魏乐府文体之外新的乐府文体。

曹植楽府の中には、俳偶の要素はすでに多く存在するが、叙述を主とする文体が保たれている。陸機は曹氏よりさらに対偶表現を多用し、修辞を尊び、義理を重視する楽府文体を造り上げた。後に、この文体は謝霊運や沈約などの晋・宋時代の楽府詩作者によって継承され、漢・魏楽府文体以外の新しい楽府文体となった。

谢灵运的乐府诗渊源出于陆机，其《长歌行》、《豫章行》、《折杨柳行》、《君子有所思行》、《悲哉行》等篇，都是写迁逝之感，写法上也像陆氏乐府一样，以〝言〟、〝意〟为主，较少〝事〟的因素，描写物色的成份，较陆氏有所增加。

謝霊運の楽府の源は、陸機の作品にまで遡ることが出来る。謝氏の「長歌行」、「豫章行」、「折楊柳行」、「君子有所思行」、「悲哉行」など作品は、すべて変遷と転移に関わる感情を描いたものである。謝氏の創作方法も陸機に似ている。つまり、「言」と「意」を重んじ、「事」を描く要素は少ない手法である。また、物や景色を描写する部分は、陸機の作品よりも分量が多い。

趙敏俐博士によって指摘されるように、中国における楽府史の視点から言えば、魏の文帝・陸機・謝霊運の楽府詩には、影響関係の迹を見ることができるようである。その点を明らかにするために、

今回は楽府「上留田行」を中心に、魏の文帝・陸機・謝霊運の作品を分析し、そうすることによって、それぞれの作者の楽府詩の特徴を明らかにしたい。

一　陸機以前の「上留田行」について

「上留田行」について、『楽府詩集』巻三八、相和歌辞・瑟調曲には次のような解説がある。

古今楽録曰、王僧虔技録有上留田行、今不歌。崔豹古今注曰、上留田、地名也。人有父母死、不字其孤弟者。隣人爲其弟作悲歌、以風其兄。故曰上留田。楽府広題曰、蓋漢世人也。云、里中有啼児。似類親父子。回車問啼児、慷慨不可止。

『古今楽録』に曰く、「王僧虔の『技録』に「上留田行」有るも、今は歌はず。（晋）崔豹『古今注』に曰く、「上留田は、地名なり。人に父母の死して、其の孤弟を字はざる者有り。隣人　其の弟の為に悲歌を作りて、以て其の兄を風す。故に『上留田』と曰ふ」と。『楽府広題』に曰く、「蓋し漢の世の人なり。云ふ、「里中に啼く児有り。親父の子に似類たり。車を回らせて啼く児に問ひ、慷慨して止む可からず」と。

「親父子」とは、父を同じくする兄弟のことである。

二

ところで、『文選』巻二八、陸機「豫章行」の「三荊歓同根」句に付す李善注に、次のような古辞の「上留田行」を引いている。

出是上独西門　出でて是に上り西門に独りなり
三荊同一根生　三荊は一根を同じくして生ぜしに
一荊断絶不長　一荊は断絶して長からず
兄弟有両三人　兄弟に両三人有り
小弟塊摧独貧　小弟は塊摧として独り貧し

これは古辞の「上留田行」の一部であろうが、これに拠れば古辞は、父母亡き後、兄が弟の面倒を全く見ないのを諷刺した内容のものと思われる。

陸機以前の「上留田行」には魏・文帝（曹植）の以下のような作品が残されている。

上留田行

居世一何不同　上留田　世に居るは一に何ぞ同じからざる　上留田
富人食稲與粱　上留田　富人は稲と粱とを食らひ　上留田
貧子食糟與糠　上留田　貧子は糟と糠とを食らふ　上留田
貧賤亦何傷　上留田　貧賤なるも亦た何ぞ傷まん　上留田

禄命懸在蒼天　上留田　　禄命は懸かりて蒼天に在り　上留田
今爾歎息将欲誰怨　上留田　　今爾は歎息し将に誰をか怨まんとす　上留田

世の中は何と同じではないことよ　上留田
金持ちは稲と粱を食べ　上留田
貧しい者は糟と糠を食べる　上留田
貧賤であってもどうして歎くことがあろうか　上留田
貧富貴賤の運命は天の決めること　上留田
今あなたは溜息をついて誰を怨もうとするのか　上留田

ところで、魏・文帝には「七歩詩」という作品が残されている。

煮豆持作羹　豆を煮て持つて羹を作る
漉豉以為汁　豉を漉して以て汁と為す
其在釜下燃　其は釜下に在りて燃え
豆在釜中泣　豆は釜中に在りて泣く
本自同根生　本同根より生じたるに
相煎何太急　相煎る何ぞ太だ急なる

『世説新語』文学篇には、次のように此の詩が作られた状況を伝えている。

文帝嘗令東阿王七歩中作詩、不成者行大法。応声便為詩曰（中略）、帝深有慚色。

文帝、嘗て東阿王をして七歩の中に詩を作らしめ、成らされば大法を行はんとす。声に応じて便ち詩を為りて曰く（中略）と、帝深く慚づる色有り。

同じく『世説新語』尤悔篇には、次のような逸話が伝えられている。

魏文帝忌弟任城王驍壯。因在卞太后閤共圍棋、並噉棗、文帝以毒置諸棗帶中、自選可食者而進。王弗悟、遂雑進之。既中毒、太后索水救之、帝預敕左右毀缾罐、太后徒跣趨井、無以汲、須臾遂卒。復欲害東阿、太后曰、汝已殺我任城、不得復殺我東阿。魏の文帝、弟任城王の驍壯なるを忌む。卞太后の閤に在りて共に圍棋し、並びに棗を噉ふに因り、文帝は毒を以て諸を棗帶の中に置き、自ら食ふ可き者を選んで進む。王悟らず、遂に雑へて之を進む。既に毒に中るや、太后水を索めて之を救はんとするも、帝預じめ左右に敕して缾罐を毀たしむれば、太后徒跣して井に趨けども、以て汲む無く、須臾にして遂に卒せり。復た東阿を害せんと欲するや、太后曰く、汝已に我が任城を殺せり、復た我が東阿を殺すことを得ざれ、と。

これらの逸話から、当時の曹植の置かれていた立場を理解することができる。その上で彼の作った「上留田行」を見てみると、そこには暗に自らの不遇を古辞に託し、兄弟の命を狙う文帝を諷刺しているようにも見える。文帝は「上留田行」の古辞の内容を踏まえつつも、そこに自らの命運を重ね合わせていたように思われる。

次に、西晋・陸機の「上留田行」を見てみよう。

二　陸機「上留田行」について

陸機の「上留田行」は、以下のようなものである。詩の内容を理解しやすいように、各句についても注釈も付しておく。（注②）

上留田行

嗟行人之藹藹　　嗟　行人の藹藹たる
駿馬陟原風馳　　駿馬は原を陟り　風のごとく馳す
軽舟泛川雷邁　　軽舟は川に泛び　雷のごとく邁く
寒往暑来相尋　　寒さは往き暑さは来たりて相尋ぐ
零雪霏霏集宇　　零る雪は霏霏として宇に集まり
悲風徘徊入襟　　悲風は徘徊して襟に入る
歳華冉冉方除　　歳華は冉冉として方に除かるるも
我思纏綿未紓　　我が思ひは纏綿として未だ紓びず
感時悼逝悽如　　時に感じて逝くを悼むこと悽如たり
ああ　道行く人のなんと多いこと
駿馬の野原を進むのは　風のように早く
軽舟が川を行くのは　雷のように急である
寒さが去り暑さがやって来るのは　つぎつぎに続き
降る雪は飛び交って　宇に集まり
悲しげな風はさまよい吹いて　襟元に入ってくる
歳月は次第に過ぎ去ってゆこうとしている
我が思いは心にまつわりついたまま和らぐこともなく
時節に感じては　過ぎゆく時を悼むばかりである

嗟行人之藹藹、駿馬陟原風馳、軽舟泛川雷邁

［行人］旅する人。『毛詩』斉風・載驅に「汶水湯湯、行人彭彭」（汶水　湯湯たり、行人　彭彭たり）とある。

［藹藹］多いさま。『毛詩』大雅・巻阿に「亦集爰止、藹藹王多吉士」（亦た集まりて爰に止る、藹藹として王　吉士多し）とあり、毛伝に「藹藹は猶ほ済済のごときなり」という。

［駿馬］良馬。『戦国策』秦策に「君の駿馬は外厩に盈ち、美女は後庭に充つ」とある。

［風馳］風のごとく早く趨る。快速のさまをいう。王褒の「四子講徳論」（『文選』巻五一）に「是以海内歓慕、莫不風馳雨集、襲雑竝至、填庭溢闕」（是を以て海内は歓慕し、風のごとく馳せ　雨のごとく集まり、襲雑して竝び至り、庭に填ち闕に溢れざるは莫し）とある。

[軽舟] はやふね。張衡の「南都賦」(『文選』巻四) に「爾乃撫軽舟兮浮清池、乱北渚兮掲南涯」(爾して乃ち軽舟に撫りて清池に浮び、北渚を乱りて南涯に掲る) と。

[雷邁] 雷のように急なこと。「電邁」に同じ。『呉志』陸遜伝に「星のごとく奔り　電のごとく邁く」とある。

寒往暑来相尋、零雪霏霏集宇、悲風徘徊入襟

[零雪] 雪の降るをいう。「零」は、おちる。ふる。

[霏霏] 雪のひどく降るさま。『毛詩』小雅・采薇に「今我来思、雨雪霏霏」(今我来たる、雪　雨ること霏霏たり) とあり、毛傳に「霏霏は甚なり」という。

[宇] のき。ひさし。

[悲風] もの悲しげな風。李陵の「答蘇武書」(『文選』巻四) に「胡地玄氷、辺土慘烈、但聞悲風蕭條之声」(胡地は玄氷し、辺土は慘烈して、但だ悲風蕭條たるの声を聞くのみ) とある。

[徘徊] さまようさま。張衡の「南都賦」(『文選』巻四) に「弾琴撫籥、流風徘徊」(琴を弾じ籥を撫へ、流風　徘徊す) と。

歳華冉冉方除、我思纏綿未紓、感時悼逝悽如

[歳華] 年月。

[冉冉] 年月の過ぎ行くさま。潘岳の「悼亡詩」(『文選』巻二三) に「荏苒冬春謝、寒暑忽流易」(荏苒として冬春謝り、寒暑　忽ち流易す) とあり、その李善注に「荏苒は猶ほ漸のごときなり。冉冉として歳月の流るる皃なり」という。

[方除] 「除」は「去」。(年月の) 過ぎ去ることをいう。『毛詩』唐風・蟋蟀に「蟋蟀在堂、歳聿其莫。今我不楽、日月其除。」(蟋蟀堂に在り、歳聿に其れ莫れん。今我楽しまずんば、日月其れ除らん) とある。

[纏綿] 心にまつわりつくさま。潘岳の「寡婦賦」(『文選』巻十六) に「思纏綿以瞀乱兮、心摧傷以愴惻」(思ひ纏綿として以て瞀乱し、心は摧傷して以て愴惻す) とある。

[紓] やわらぐ。とける。『広雅』釈詁に「紓は解なり」とある。

[感時悼逝悽如] 「感時」とは、時節に感じ入ること。曹攄の「思友人」(『文選』巻二九) 詩に「感時歌蟋蟀、思賢詠白駒」(時に感じて蟋蟀を歌ひ、賢を思ひて白駒を詠ふ) とある。

以上が、陸機の「上留田行」の内容である。さて今、陸機の生涯を概観すれば、およそ以下のようである。

陸機は、祖国呉が晋の太康元年 (呉の天紀四年・二八〇) に晋によって滅ぼされた後、太康の末年 (二八九)、弟の雲とともに、かつての敵国である晋に入った。その生涯を「入洛以前」と「入洛以後」とに分けて紹介する。

①入洛以前の陸機

陸機 (二六一～三〇三) は字を士衡といい、呉の永安四年 (二六一) に呉の大司馬であった陸抗 (二二六～二七四) の第四子として生まれた。そもそも陸氏は、呉にあっては名門で、抗の父、すなわち機

の祖父の陸遜（一八三～二四五）は、呉国の重鎮であった。『呉志』陸遜伝に拠れば、遜は字は伯言で、もとの名を議といった。陸氏は代々、江東の大族であったが、遜は若くして父を失い、二十一歳の時に、孫権の幕府に出仕した。以後、東西曹の令史を歴任し、海昌の屯田郡尉となった。のち、孫権の兄である策の女を妻とし、その間に生まれたのが陸抗、すなわち機の父である。

陸遜の軍事面における活躍は枚挙に暇がない。呉の黄武元年（二二二）、孫権の命によって大都督・仮節となった遜は、朱然・潘璋・宋謙・韓當・徐盛・鮮于丹・孫桓ら五萬人を率いて、進攻してきた蜀の劉備の大軍を撃ち破った。同七年（二二八）、孫権は郡陽の太守であった周魴に命じて、魏の大司馬の曹休を誘（おびき）かせた。果たして曹休は、兵を挙げて皖に入ってきた。そこで孫権は陸遜に黄鉞を授けて大都督と為し、曹休の軍を迎え撃たせた。陸遜の軍は一萬餘りの首を斬り、多くの戦利品を得た。この黄武七年の戦いに関しては、陸機の「呉丞相陸遜銘」（『呉志』陸遜伝注所引）に、次のように記されている。

魏大司馬曹休、侵我北鄙。乃假公黄鉞、統御六師及中軍禁衛、而摂行王事。主上執鞭、百司屈膝。

魏の大司馬曹休は、我が北鄙を侵す。乃ち公に黄鉞を假し、六師及び中軍の禁衛を統御して、王事を摂行せしむ。主上　鞭を執れば、百司　膝を屈す。

その後、呉の黄龍元年（二二九）には、上大将軍・右都護に拝せられ、太子を輔佐し、荊州および豫章三郡の事を掌った。赤烏七年（二四四）には、顧雍に代わって丞相と為り、陸氏は隆盛を極めたが、孫権の太子を廃せんとする全琮と対立し、ために遜の甥である顧譚・顧承・姚信の三人は流徒され、遜と交わりのあった太子太傅の吾粲も獄死した。遜自身も孫権から責められ、ついに憤りのあまり卒してしまった。時に六十三歳であった。陸遜の亡き後、陸氏を嗣いだのが抗であった。『呉志』陸抗伝によれば、抗は字は幼節で、孫策の外孫である。父の遜が卒した時、二十歳であった。その年、建武校尉に拝せられ、父遜の兵五千人を領した。

この陸抗の軍事面における活躍も、父の遜に引けを取らぬものがあった。呉の建興元年（二五二）には、奮威将軍となり、のち太平二年（二五七）には、柴桑の督として、壽春を攻略した魏の将諸葛誕を破り、征北将軍となった。永安二年（二五九）に鎮軍将軍に拝せられ西陵を都督した。元興元年（二六四）、孫皓が即位すると鎮軍大将軍を加えられ、荊州牧となった。鳳皇元年（二七二）には都護を拝し、同二年春、大司馬・荊州牧となった。

このように、父の遜と同じく呉國の中心的人物であった抗は、鳳皇三年（二七四）秋、病のために卒した。抗が卒した後、長子の晏が嗣いだ。その後の様子については、『呉志』陸抗伝に、次のようにある。

（陸抗、鳳皇三年）秋遂卒。子晏嗣。晏及弟景・玄・機・雲、分領抗兵。晏為裨将軍・夷道監。……景、字士仁。以尚公主拝騎都尉、封毗陵侯。既領抗兵、拝偏将軍・中夏督。澡身好学、著書数十篇也。

秋、遂に卒す。子の晏嗣ぐ。晏及び弟の景・玄・機・雲は、抗の兵を分領す。晏は裨将軍・夷道の監と為る。……景、字は士仁。公主を尚るを以て騎都尉に拝せられ、毗陵侯に封ぜらる。既に抗の兵を領し、偏将軍・中夏の督を拝せらる。身を澡め学を好み、書数十篇を著すなり。

すなわち、父抗の死後、その兵を晏・景・玄・機・雲の五子が分割し統率したのである。

ところで、ここにあるように、第二子の景は学問を好み、なかなかの文章家であったらしい。此の記述の後の裴松之注に引く『文士伝』には、

陸景母張承女、諸葛恪外生。

陸景の母は張承の女、諸葛恪の外生なり。

とある。もし、抗の五子が同腹の子であるとするならば、機の母は張承の女ということになる。張氏とは、呉の四姓「朱・張・顧・陸」の一つで、呉國にあっては名門であり、張承の父の張昭（『呉志』七）は、『春秋左伝』に通じた学者でもあり、孫策の長史・撫軍郎将となり、その創業に貢献し、孫権の下では輔呉将軍となった呉の重鎮である。機や弟の雲が、学問にすぐれ文章の名手であった所以は、或いは張昭の血を継ぐことによるものであろうか。

かかる名門の出である陸機は、二十歳の時に呉の滅亡という悲運に見舞われる。呉の滅亡は、そのまま陸氏一族の滅亡でもあった。呉の鳳皇三年（二七四）父抗の亡き後、父の兵を分領していた抗の五子のうち、長子の晏は天紀四年（二八〇）、西晋の龍驤将軍王濬の別軍に殺され、次子の景もまた害に遇ってしまった。時に景は三十一歳であった。二人の兄を相次いで失った陸機の悲しみは、いかばかりであったか。祖國の滅亡、血を分けた二人の兄の死を目のあたりにして、陸機は弟の雲ともに、旧里の華亭に退居した。華亭については『世説新語』尤悔篇注に引く『八王故事』に、

華亭、呉由拳縣郊外墅也。有清泉茂林。呉平後、陸機兄弟共遊於此十餘年。

華亭は、呉の由拳縣の郊外の墅なり。清泉茂林有り。呉平げられし後、陸機兄弟は共に此に遊ぶこと十餘年なり

とある。退居した期間については、『晋書』本伝には、

退居旧里、閉門勤学、積有十年。

旧里に退居し、門を閉ざして学に勤め、積みて十年有り。

とい、また『文選』巻十七「文賦」注に引く臧榮緒『晋書』では

退臨旧里、与弟雲勤学、積十一年。

退きて旧里に臨み、弟の雲と学に勤め、積むこと十一年なり。

という。十年、十一年、十餘年と、いささかの違いはあるけれども、およそ十年の間、旧里の華亭に退居していたものと思われる。此の間の二陸の状況を史書は伝えてくれないが、「弁亡論」二篇は、この時に書かれたものである。「弁亡論」とは、「亡びたるを弁ずるの論」で、そこで陸機は、呉國の興隆と滅亡の原因とを論じている。まず漢末の董卓の乱に対し、群雄が義兵を挙げたことから説き起こし、わけても孫堅のごとき忠節の士はいなかったことを述べる。つづいて孫堅のあとを嗣いだ孫策は、張昭・周喩の二傑を得て、江外の地を安定させたが、大業なかばにして死に、そのあとを嗣いだ孫権が、祖父陸遜ら多くの賢能の士を招き、荊呉の地に割據して、魏・蜀と対抗し、天下三分の業を成したことを述べる。しかし孫権の死後、孫亮・孫休・孫晧と続くが、すでに補佐の老臣はなく、晋軍によって呉國は滅ぼされてしまう、というのが上篇の内容である。下篇では、孫権が呉を隆盛に導いたのは、多くの賢臣を挙げ用いたからであるが、その後、呉國が滅亡してしまうのは、我が父陸抗のごとき良将がいなかったからであると言う。陸機は、祖國の滅亡に対する口惜しさを語り、同時にまた祖父陸遜・父陸抗の功業を称揚して、過去の榮光に対する無念さを述べるのである。

以上が、入洛までの状況であるが、次に入洛後の陸機の行跡を見てみよう。

②入洛後の陸機

太康十年（二八九）、洛陽入りした陸機は、まず張華の許を訪れた。その当時、西晋王朝にあって政界・文壇の中心的存在であった張華は、多くの優秀な人材を進んで招き集めていた。張華は弟の雲とともに入洛してきた陸機を、しばしば高官たちに推薦した。陸機を最初に挙用したのは、楊駿であった。時に太博であった楊駿は、永熙元年（二九〇）機をとりたてて祭酒とした。翌元康元年（二九一）、楊駿が賈后に殺されると、機は愍懐太子司馬遹の洗馬となり、弟の雲とともに、太子府に仕えた。この時、賈后の甥の賈謐は、散騎常侍として太子府に仕えており、陸機の太子府勤務も、張華の後押しと賈謐の推輓によるものと思われる。陸機と賈謐との交わりは、この頃から始まったと推測されるが、やがて陸機は元康三年（二九三）頃に、著作郎に転じている。雲と倶に賈謐の「二十四友」に名を連ねることになったのも、この頃のことである。

元康四年（二九四）、陸機は弟雲ともに、呉王司馬晏の郎中令として洛陽を離れ、呉王府のある淮南に赴いた。洛陽に入った陸機は、

時々に望郷の念にかられていたが、いったん洛陽を出て故郷に還ってみると、今度は地方勤めの悲哀を感じるのであった。

元康六年（二九六）、陸機は尚書中兵郎として、再び入朝し、やがて殿中郎に転じている。その後、元康八年（二九八）には、著作郎になっている。

永康元年（三〇〇）、趙王司馬倫が政治を輔佐するや、陸機は招かれてその相國参軍となった。倫は、字を子彝といい、宣帝司馬懿の第九子である。賈謐や郭彰らと交わりがあり、賈后の絶大な信任を受けていた。そこで倫は、賈后に録尚書・尚書令の官に就くことを求めたのであるが、張華や裴頠の反対にあい、それがかなわなかった。ために趙王倫は賈后を廃して庶人とし、賈謐を殺した。陸機はといえば、この時、賈謐を誅した功績によって、関内侯の爵を賜わっている。かつてはそのサロンで、「二十四友」の遊びに連なった機にとって、賈謐誅殺に加わったことは、心の大きな傷となっていつまでも消えることはなかったであろうが、それと同時に、このことは西晋という時代を象徴する一つの出来事でもある。この前年（二九九）には、かつて陸機が洗馬として仕えた愍懐太子が、賈后の手によって廃嫡され、翌年（三〇〇）、賈后の派遣した宦官の手によって殺されている。同じ年（三〇〇）、陸機ら南人の後楯として、彼らを常に暖かく見守ってきた張華も死刑になっている。

永寧元年（三〇一）、趙王司馬倫は、恵帝司馬衷を幽閉し、自ら帝を称した。倫はこのとき陸機を中書郎とした。趙王倫は帝位を簒奪して僅か三か月あまりで、齊王司馬冏をはじめとする諸王の反乱によって帝位を失い、死を賜わったのであるが、冏は、陸機が中書省に勤務していたから、倫の下で、九錫文や祠位の詔の作成に、機が必ずや関与しているであろうとの嫌疑をかけたのである。捕えられて裁判にかけられた陸機は、みずからの無罪を懸命に訴えた。「平原内史を謝するの表」（『文選』巻三七）には、次のようにある。

而横為故齊王冏所見枉陷、誣臣与衆人共作禅文、幽執囹圄、當為誅始。臣之微誠、不負天地、倉卒之際、慮有逼迫、乃与弟雲及散騎侍郎袁瑜、中書侍郎馮熊、尚書右丞崔基、廷尉正顧榮、汝陰太守曹武、思所以獲免、陰蒙避廻、岐嶇自列。片言隻字、不関其間。事蹤筆跡、皆可推校。

而も横ままに故の齊王冏の為に枉げ陥れられ、臣は衆人と共に禅文を作ると誣られ、囹圄に幽執せられ、誅始せ為るるに當たる。臣の微誠、天地に負かざるも、倉卒の際、逼迫有らんことを慮り、乃ち弟の雲及び散騎侍郎袁瑜・中書侍郎馮熊・尚書右丞崔基・廷尉正顧榮・汝陰太守曹武と、免るるを獲る所以を思ひ、陰かに避廻を蒙り、岐嶇として自ら列す。片言隻字も、其の間に関らず。事蹤筆跡、皆な推校す可し。

この表は、陸機の命を救ってくれ、機を大将軍の軍事に参与させ、表して平原内史とした成都王司馬穎に対して、感謝の氣持ちを述べ

たものであるが、この中で「片言隻字も、其の間に関らず。事蹤筆跡、皆な推校す可し」と言っているように、自分は九錫文や祠文には関与していなかったと、機は必死の思いで弁明している。また李善注に引く王隠『晋書』には、機の「呉王晏に与ふる表」があり、その中でも、

　禅文本草、今見在中書。一字一迹、自可分別。

禅文の本草は、今　見（げん）に中書に在り。一字一迹、自ら分別す可し。

と、同様のことを述べている。頼みとなる張華もすでに此の世になく、もはやこれまでと思われた時、陸機を救ってくれたのは呉王晏と成都王穎であった。

　政治の実権が趙王倫から齊王冏に移っても、世の混乱は少しも改善されることはなかった。倫を倒した功績を自慢し、爵を受けても譲ることを知らない冏に対し、陸機は「豪士の賦」を著して、それを諷刺した。しかし、冏は機の言わんとしていることが理解できず、ついに恵帝の弟の長沙王司馬乂によって討たれてしまった。太安元年（三〇二）のことである。以後、長沙王乂・成都王穎・河間王顒の三人が権力の中枢を構成することになる。

　時に陸機は、みずからの命を救ってくれたこともあり、あわせてその人柄が謙虚であり、必ずや晋王室を興隆してくれるであろうとの考えから、弟の雲とともに、その身を成都王穎に委ねていた。穎は上表して機を平原内史、雲を清河内史とした。

　長沙王乂・成都王穎・河間王顒の鼎立政権は、もろくも崩壊してしまった。そもそも、それぞれ内に野心を抱いていた三者の関係が、いつまでも均衡を保ち続けるのは無理なことであった。成都王穎は河間王顒と共に兵を挙げ、長沙王乂を討ったのである。『晋書』巻四・恵帝紀には、

（太安二年）八月、河間王顒、成都王穎、挙兵討長沙王乂。

八月、河間王顒・成都王穎は、兵を挙げて長沙王、乂を討つ。

とあり、同じく『晋書』巻五九・成都王穎伝には、

　穎方恣其欲、而憚長沙王在内、遂与河間王顒、表請誅后父羊玄之、左将軍皇甫商等、檄乂使就第。

穎は方（まさ）に其の欲を恣（ほしい）ままにして、長沙王乂の内に在るを憚り、遂に河間王顒と、表して后の父の羊玄之・左将軍の皇甫商らを誅せんことを請ひ、乂に檄して第に就かしむ。

とある。此のとき穎は、陸機を後将軍・河北大都督に任命し、北中郎将の王粋や冠軍の牽秀らの諸軍二十餘萬人を、機の麾下に置いた。機は「三世に将たるは、道家の忌むところである。あわせて亡國呉の出である私が官位にあり、群士の右に居ることになってし

まった。王粋や牽秀らは、きっと私を怨んでいよう」と思い、都督となることを固辞した。機と同郷の孫恵も、都督を王粋に譲るように機に勧めた。しかし、穎はそれを認めず、機の方も結局は軍を率いる決意を固めた。弟の雲は、此の度の兄の晴れの出兵を誇りに思い、「南征の賦」を作って、それを讃えた。

さて、陸機が大軍を率いて戦場に立つや、突如、軍旗が折れてしまった。この不吉な出来事に、さすがの機も、心中、何らかの不安を感じていた。朝歌を出発した陸機の軍は、出陣の太鼓の音を数百里の彼方まで響かせて、河橋へと向かった。太安二年（三〇三）八月のことである。それから二か月後の十月、鹿苑で長沙王乂の軍と戦ったが、機の軍は大敗し、七里澗（洛陽の東、穀水の一部）に退いた。死者は川面を埋め尽くし、ために川の水が流れなくなったほどであった。この朝歌から七里澗に至るまでの「河橋の役」の様子は、『晋書』恵帝紀には、次のように記されている。

（太安二年八月）穎遣其将陸機、牽秀、石超等、来逼京師。……冬十月壬寅、帝旋于宮。石超焚緱氏、服御無遺。丁未、破牽秀、范陽王虓于東陽門外。戊申、破陸機于建春門。石超走。斬其大将賈崇等十六人、懸首銅駝街。

穎は其の将の陸機・牽秀・石超らを遣はし、来たりて京師に逼らしむ。……冬十月壬寅、帝は宮に旋る。石超は緱氏を焚き、服御遺す無し。丁未、牽秀・苑陽王虓を東陽門の外に破る。戊申、陸機を建春門に破る。石超は走ぐ。其の大将の賈崇（陸機伝は賈稜に作る）ら十六人を斬りて、首を銅駝街に懸く。

また、『水経』穀水注に引く『晋後略』には、

成都王穎、使呉人陸機為前鋒都督、伐京師。軽進為洛軍所乗、大敗于鹿苑。人相登躡、死于塹中及七里澗。澗為之満。

成都王穎は、呉人の陸機をして前鋒都督と為し、京師を伐た使む。軽しく進みて洛軍の乗ずる所と為り、鹿苑に大敗す。人は相ひ登り躡みて、塹中に死して七里澗に及ぶ。澗は之が為に満つ。

とある。軍旗が折れたことが前兆となって、機の軍はあっけなく敗れてしまった。かねてより陸機兄弟を怨んでいた孟玖や牽秀らの讒言により、陸機は軍中で処刑された。時に四十三歳であった。

ところで陸機には、「百年歌」という次のような詩が残されている。（注③）

［其一］

一十時　　一十の時
顔如蕣華曄有暉　　顔は蕣華の如く　曄に暉き有り
体如飄風行如飛　　体は飄風の如く　行くに飛ぶが如し

十二

孌彼孺子相追隨　孌(れん)たる彼の孺子(じゅし)　相ひ追隨し
終朝出遊薄暮帰　終朝に出遊して　薄暮に帰る
六情逸豫心無違　六情　逸豫して　心違ふ無し
清酒漿炙奈楽何　清酒　漿炙　楽しみを奈何せん
清酒漿炙奈楽何　清酒　漿炙　楽しみを奈何せん

十代の時は
顔は木槿(むくげ)の花のように　照り輝き
体は旋風のように　飛ぶがごとく軽やかである
美しい少年たちが付き従い
朝早く遊びに出かけ　夕暮に帰ってくる
感情は楽しく　心に逆らうこともない
清酒と炙り肉　この楽しみを何としよう
清酒と炙り肉　この楽しみを何としよう

[其二]

二十時　二十の時
膚体彩澤人理成　膚体　彩澤　人理成り
美目淑貌灼有榮　美目　淑貌　灼として榮有あり
被服冠帶麗且清　被服　冠帶　麗にして且つ清し
光車駿馬遊都城　光車　駿馬　都城に遊び
高談雅歩何盈盈　高談　雅歩　何ぞ盈盈たる
清酒漿炙奈楽何　清酒　漿炙　楽しみを奈何せん
清酒漿炙奈楽何　清酒　漿炙　楽しみを奈何せん

二十代の時は
皮膚は艶やかに　おとならしくなり
美しい目に淑やかな容貌で　血色も良い
衣冠装束は綺麗で清らか
美しい車に乗り駿馬を馳せて　都城に遊び
高らかに談じ雅びに歩くのも　淑やかに美しい
清酒と炙り肉　この楽しみを何としよう
清酒と炙り肉　この楽しみを何としよう

[其三]

三十時　三十の時
行成名立有令聞　行なひは成り名は立ちて　令聞(れいぶん)有り
力可扛鼎志干雲　力は鼎(かなえ)を扛(あ)ぐ可く　志は雲を干(をか)す
食如漏巵気如熏　食は漏巵(ろうし)の如く　気は熏(くん)の如し
辞家観國綜典文　家を辞して國を観て　典文を綜(す)ぶ
高冠素帶煥翩紛　高冠　素帶　煥(くわん)として翩紛(へんぷん)たり
清酒漿炙奈楽何　清酒　漿炙　楽しみを奈何せん
清酒漿炙奈楽何　清酒　漿炙　楽しみを奈何せん

三十代の時は
身は定まり名も挙がり　よき評判も有る
力は鼎をあげるがごとく強く　志は雲をも侵すほどに高い
食欲は飽きることを知らないし　意氣も盛んである
家を離れて上京し　役人となって法典文書をつかさどる
高冠をつけ白帶をしめ　輝かしいばかりである
清酒と炙り肉　この楽しみを何としよう
清酒と炙り肉　この楽しみを何としよう

［其四］

四十時　　四十の時
体力克壮志方剛　体力は克く壮にして　志は方に剛なり
跨州越郡還帝郷　州を跨ぎ郡を越えて　帝郷に還り
出入承明擁大璫　承明に出入して　大璫を擁す
清酒漿炙奈楽何　清酒　漿炙　楽しみを奈何せん
清酒漿炙奈楽何　清酒　漿炙　楽しみを奈何せん

四十代の時は
体力は壮健にして　意氣は剛毅である
州や郡の長官を歴任して　帝都に還り
承明門に出入りしては　大璫を抱く
清酒と炙り肉　この楽しみを何としよう
清酒と炙り肉　この楽しみを何としよう

［其五］

五十時　　五十の時
荷旄杖節鎮邦家　旄を荷ひ節に杖りて　邦家を鎮む
鼓鐘嘈囋趙女歌　鐘を鼓つこと嘈囋として　趙女は歌ひ
羅衣綷粲金翠華　羅衣は綷粲として　金翠は華なり
言笑雅舞相経過　言笑　雅舞　相ひ経過す
清酒漿炙奈楽何　清酒　漿炙　楽しみを奈何せん
清酒漿炙奈楽何　清酒　漿炙　楽しみを奈何せん

五十代の時は
指図旗をにない割符を携えて　国難を鎮めた
鐘が打ち鳴らされ　趙の娘は歌い
衣装は艶やかに　金や翡翠の髪飾りは華やかである
談笑の声と舞の音楽とが　こもごも起こる
清酒と炙り肉　この楽しみを何としよう
清酒と炙り肉　この楽しみを何としよう

［其六］

六十時　　六十の時
年亦耆艾業亦隆　年も亦た耆艾にして　業も亦た隆し

驂駕四牡入紫宮　驂駕　四牡　紫宮に入る
軒冕婀那翠雲中　軒冕　婀那たり　翠雲の中
子孫昌盛家道豊　子孫　昌盛にして　家道は豊かなり
清酒漿炙奈楽何　清酒　漿炙　楽しみを奈何せん
清酒漿炙奈楽何　清酒　漿炙　楽しみを奈何せん

六十代の時は
年も長けたし　功業も隆いものがある
三頭立て　四頭立ての馬車で　宮殿に入り
高官の車や冠は美しく　翠なす雲の中をかけるようである
子孫も栄え　家も豊か
清酒と炙り肉　この楽しみを何としよう
清酒と炙り肉　この楽しみを何としよう

［其七］
七十時　七十の時．
精爽頗損膂力愆　精爽　頗や損なはれ　膂力　愆はる
清水明鏡不欲観　清水　明鏡　観るを欲せず
臨楽対酒転無歓　楽に臨み酒に対ふも　転た歓ぶ無し
攬形修髪独長嘆　形を攬り髪を修めて　独り長嘆す

七十代の時は
気力も次第に衰え　体力も失われる
清水や鏡を　見ようとも思わない
音楽を聞き酒を飲んでも　楽しいことはない
身をただし髪を整えては　一人長嘆する

［其八］
八十時　八十の時
明已損目聰去耳　明は已に目を損ひ　聰は耳を去る
前言往行不復紀　前言　往行　復た紀さず
辞官致禄帰桑梓　官を辞し禄を致して　桑梓に帰る
安車駟馬入旧里　安車　駟馬　旧里に入れば
楽事告終憂事始　楽事　終りを告げ　憂事　始まる

八十代の時
目は明るさを失ってしまい　耳もよく聞こえない
前に言ったこと行ったこと（忘れてしまって）憶えておれない
官をやめ俸禄を返上して　郷里に帰る
四頭立ての車に乗って　故郷に戻れば
楽しいことはなくなり　憂うることばかり

［其九］
九十時　九十の時

日告耽瘁月告衰　日に耽瘁を告げ　月に衰を告ぐ
形体雖是志意非　形体は是なりと雖も　志意は非なり
言多謬誤心多悲　言に謬誤多く　心に悲しむこと多し
子孫朝拜或問誰　子孫朝に拜するも　或いは誰かと問ふ
指景玩日慮安危　景を指し日を玩んでは　安危を慮ふ
感念平生泪交揮　平生を感念しては　泪交ごも揮る

九十代の時は
日ごとに疲れ　月ごとに衰え
体の方はまだましだが　気持ちの方がままならない
言葉はよく間違えるし　心は悲しいことばかり
子や孫が朝あいさつしても　誰かと問ねる
来る日も来る日も　老先の心配ばかり
若い頃を思い起こしては　涙はあふれる

［其十］

百歳時　百歳の時
盈数已登肌肉單　盈数已に登り　肌肉單なり
四支百節還相患　四支　百節　還た相ひ患ふ
目若濁鏡口垂涎　目は濁鏡の若く　口は涎を垂る
呼吸嚬蹙反側難　呼吸は嚬蹙として　反側にも難し
茵褥滋味不復安　茵褥　滋味も　復た安からず

百歳になれば
寿命も尽きて　体も痩せてしまい
両手両足　体の節々も傷む
目は濁った鏡のようで　口にはよだれを垂らしてしまい
息をするにも辛く　寝返りをうつのも苦しい
横になっても食事をしても　また安らぐことはない

この詩が何時、作られたものなのかはよく分からないが、詩の内容から見て恐らく陸機が入洛する以前のものではないかと想像される。

入洛前の呉における陸氏は、呉の四姓「朱・張・顧・陸」の一つであり、名門中の名門であった。陸機が弟の雲と前後して洛陽に入ったのは太康十年（二八九）頃であり、陸機は二十九歳であった。機は太安二年（三〇三）に四十三歳で亡くなっているので、この詩の［其四］「四十時」以降の内容は、自らの将来を想像してのものである。その内容から判断すれば、やはり此の詩は陸機の入洛前の作であることは間違いないであろう。

しかるに、陸機の「上留田行」は、

歳華冉冉方除　歳華は冉冉として方に除かるるも
我思纏綿未紓　我が思ひは纏綿として未だ紓びず

感時悼逝悽如　時に感じて逝くを悼むこと悽如たり

と述べているように、故郷を離れて思うに任せない自らの運命を古辞に乗せて詠っているように思われる。

三　謝霊運「上留田行」について

次は、謝霊運の「上留田行」をみてみよう。

上留田行

薄遊出彼東道　上留田　薄遊して彼の東道に出づ　上留田
薄遊出彼東道　上留田　薄遊して彼の東道に出づ　上留田
循聽一何矗矗　上留田　循聽　一に何ぞ矗矗たる　上留田
澄川一何皎皎　上留田　澄川は一に何ぞ皎皎たる　上留田
悠哉遏矣征夫　上留田　悠かなる哉　遏たり征夫　上留田
悠哉遏矣征夫　上留田　悠かなる哉　遏たり征夫　上留田
両服上阪電遊　上留田　両服は阪を上りて電のごとく遊き　上留田
舫舟下遊飆駆　上留田　舫舟は下り遊きて飆のごとく駆す　上留田
此別既久無適　上留田　此の別れ既に久しきも適ふこと無し　上留田
此別既久無適　上留田　此の別れ既に久しきも適ふこと無し　上留田

十六

寸心繫在万里　上留田　寸心　繫がりて万里に在り　上留田
尺素遵此千夕　上留田　尺素　此に遵ひてより千夕　上留田
秋冬迭相去就　上留田　秋と冬と迭ひに相ひ去就す　上留田
秋冬迭相去就　上留田　秋と冬と迭ひに相ひ去就す　上留田
素雪紛紛鶴委　上留田　素き雪は紛紛と鶴のごとく委つ　上留田
清風飆飆入袖　上留田　清き風は飆飆と袖に入る　上留田
歳云暮矣増憂　上留田　歳は云に暮れぬ憂ひを増す　上留田
歳云暮矣増憂　上留田　歳は云に暮れぬ憂ひを増す　上留田
誠知運来詎抑　上留田　誠に知る運の来るを詎ぞ抑めん　上留田
熟視年往莫留　上留田　年の往くを熟視して留むる莫し　上留田
薄い俸禄で仕官することになり彼の東道に出た　上留田
薄い俸禄で仕官することになり彼の東道に出た　上留田
定めに順おうとするが何と行くての険しいことよ　上留田
清らかに澄んだ川の何とも白く輝いていることか　上留田
遙かなことよ遠いことよ旅行く人　上留田
遙かなことよ遠いことよ旅行く人　上留田
馬は山阪を登って電のように走る　上留田

舟は川を下って飄(ひょう)のように流れゆく　上留田
此の度の別れは既に久しくなったけれど　うまくいかない
上留田
此の度の別れは既に久しくなったけれど　うまくいかない
上留田
我が心は万里の彼方に繋がれている　上留田
日数は　この地に来てより千夕となる　上留田
秋と冬は互いに去ったり来たり　上留田
秋と冬は互いに去ったり来たり　上留田
素(しろ)い雪は紛紛と鶴が降りてくるようだ　上留田
清(つめ)たい風は飄飄と吹いて袖に入る　上留田
今年も暮れてしまし憂いは増すばかり　上留田
今年も暮れてしまし憂いは増すばかり　上留田
運命の巡りのどうしようもないことが　よく分かった　上留田
年月の過ぎゆきのをじっと見つめるだけで留める術も無い
上留田

森野繁夫先生は、霊運の「上留田行」について、次のように指摘しておられる。(注④)

内容は、陸機の作の「他郷にあって不遇のままに歳月だけが過ぎ去ってゆくのを歎く」というものと同じであるが、ただ表現されている個々の内容が具体的である。そうしてそれは霊運自身の或る時期の様子を詠じたものではなかろうかと考えられる。すなわちそれは、霊運三八歳の時、少帝の景平元年（四二二）に永嘉太守を辞めて始寧の山居に帰った後、四二歳の時、文帝の元嘉三年（四二六）に徴されて秘書監となり更に侍中になった時期である。『宋書』謝霊運伝には、その時期の様子が次のように記されている。

太祖（文帝）は即位して、徐羨之らを誅すると、霊運を徴して秘書監にしようとしたが、彼は二度の召しにも応じなかった。帝は光禄大夫の范泰に命じ、霊運に書簡を与え、出仕するように敦く奨めさせたので、霊運はようやく都に出て職に就いた。帝は彼に秘閣の図書を整理させ、遺闕を補足させた。又た晋氏一代の初めから終りまで、それまで一人の著した歴史が無かったので、霊運に『晋書』の撰作を命じた。しかし、全体の構想はほぼできたが、結局『晋書』は完成しなかった。次いで侍中に遷り、日にタベに帝に引見され、賞遇は甚だ厚いものがあった。霊運は詩・書のいずれについても他の人を寄せ付けないものがあり、詩文を作りおわると自分でそれを書写した。文帝は賞賛して「二宝」と言った。

霊運は以前から、自分は名家の出で才能もあるから、時政に参加するはずのものと考えていたので、この度の徴召が

あったとき、当然政治を担当するはずと思っていた。ところが、いざ出てきてみると、文帝はただ文章・学問のことで会うだけであり、宮中の宴会のたびに侍して談賞するのみであった。時に王曇首、王華、殷景仁らは、名位は素より霊運に及ばないのに、並びに任遇されていた。霊運は忿懣やるかたなく、病気と称して朝廷に出ていかなくなった。そうして池を穿ち生け垣を植え、竹を種え菫を樹えるなど、役所の人夫を使役して限度がなかった。城郭から游行しては、一日に百六七十里も進み、十日たっても帰らないことがあった。にもかかわらず朝廷に届けも出さないうえに、急用のための許可さえ請求しなかった。帝は大臣を傷つけることをのぞまず、それとなく諭して霊運の方から解任を求めるようにさせた。霊運はそこで病気になったと上表し、帝は休暇を与えて東に帰らせた。

霊運はこのように、都にあって忿懣やるかたなき生活を送ること二年、元嘉五年の三月に官を辞し始寧に帰ってゆく。霊運の生涯のうちの以上のような一時期を、その「上留田行」に当てはめてみると、

先ず最初の四句、

薄遊して彼の東道に出づ　上留田
薄遊して彼の東道に出づ　上留田
循聴　一に何ぞ矗矗たる
澄川　一に何ぞ皎皎たる

については、霊運が文帝に徴されて都へ出て行く時の様子に当たる。「東道」とは東への道であるから、会稽の始寧から都へは方向が異なるが、これは文飾のうちとしてよかろう。「循聴」は、『易』の「需」卦を踏まえている。「運命に従って都へ行こうとするが、何と行くての険しいことよ」つまりこれは、運命と諦めて都へ行くことにしたが、これから先、都で待ち構えている困難な状況を予測しての言葉ともとれよう。そうして次の「澄川一何皎皎」は、「我が心の何と澄みきっていることよ」と、困難な運命に立ち向かおうとする自分の心の状態を言ったものではなかろうか。

⑤～⑧の四句、

悠かなる哉　逷たり征夫　上留田
悠かなる哉　逷たり征夫　上留田
両服は阪を上りて電のごとく遊
舫舟は下り遊きて飆のごとく駆す

は道中の様子。

次の、⑨～⑫の四句、

此の別れ既に久しきも適ふこと無し　上留田
此の別れ既に久しきも適ふこと無し　上留田
寸心　繫がりて万里に在り　上留田
尺素　此に遵ひてより千夕　上留田

これは都での役職が心にそまぬものであったことをいうのであろう。霊運の都での生活は、元嘉三年春（四二歳）から五年春まで、約二年間であったから、ここに「千夕」とあるのは少し多すぎるが、これも楽府ゆえということで許されよう。

次の⑬～⑯の四句、

秋と冬と迭ひに相ひ去就す　上留田
秋と冬と迭ひに相ひ去就す　上留田
素き雪は紛紛と鶴のごとく委つ　上留田
清き風は飄飄と袖に入る　上留田

は、都において為すことなく過ぎてゆく月日のこと。

そうして終わりの四句、⑰～⑳、

歳は云に暮れぬ憂ひを増す　上留田
歳は云に暮れぬ憂ひを増す　上留田
誠に知る運の来るを詎ぞ抑めん　上留田
年の往くを熟視して留むる莫し　上留田

は、運命というものは人の力ではどうすることもできないものであると諦めて、月日の過ぎて行くのを唯だじっと見つめているだけであると、その時の心境を述べている。

以上、森野先生が分析したように、霊運の「上留田行」は、都で心満たされない二年間を描いた作品である。また、この作品は陸機の同題作にのせて詠じたものとも考えられる。前述のように、陸機の「上留田行」は、不遇のまま他郷で歳月を経ることへの嘆きであり、その感情は直線的に詠われている。これに対して霊運の場合は、場面を繊細かつ具体的に描くことによって、作者の心情を表している。これは、謝霊運が楽府を継承する際に呈出した特色といえよう。

四　まとめ

以上、今回は楽府「上留田行」を中心に、魏の文帝（曹植）・西晋の陸機・劉宋の謝霊運の作品を取り上げ、そこに込められた作者を思いを読み解くとともに、それぞれの作品の影響関係について見て行った。その結果、魏・文帝の「上留田行」は、古辞を踏まえながらも、そこに自らの不遇な人生を重ねてその思いを描こうとしたものとなっている。また、陸機の作品は他郷にあって不遇のままに歳月だけが過ぎ去ってゆくのを歎く、入洛までに抱いた人生の抱負と程遠い現状への憂愁を、兄弟の不仲などを歌う古辞「上留田行」に託し、新らしい楽府を作り出した。さらに、謝霊運の場合は、自分の境遇を陸機に重ねながらも、細かな描写を取り入れることによって、憂いの心情が染み出るような作品に仕上げた。これらの同題作品を通して、三人の作者の間に存在する明白な継承関係が確認できると同時に、それぞれの作品はまさに三者三様であり、作者各自の体験を込めた文学創作こそは楽府の文体を発展させたといえるのではなかろうか。また、今後もこのような同題作品を分析することによって、趙敏俐先生が指摘したような時間軸の継承関係を解明

するとともに、詩人の特徴をより明晰に取り出すこともできるであろう。

【注】

①趙敏俐『中国詩歌史通論』（人民文学出版社）第三章「魏晋南北朝詩歌史総論」を参照。日本語は筆者訳。

②佐藤利行『陸士衡詩集』（白帝社）を参照。

③佐藤利行「百年歌考」（『中国学論集』第七号・中国文学研究会）を参照。

④森野繁夫「謝霊運の楽府（上）―「上留田行」を中心に―」（『中国学論集』第九号・中国文学研究会）を参照。

Yuefu Poems by Ru Ji: about *Shang Liu Tian Xing*

Toshiyuki SATO and Liu JINPENG

Lu Ji is an important poet in producing Yuefu during the Six Dynasties period. His works of Yuefu inherited the style of the Cao family's in Wei period and impinge on the writers coming after, for example, Xie Lingyun. In this paper, authors will mention three pieces of ancient Yuefu *Shang Liu Tian Xing*, those are written by Cao Zhi, Lu Ji and Xie Lingyun. By comparing these Yuefu poems, authors should finger out the connection the three poets, and investigate the characteristics of these works as well.